アルトーの二つの「上奏文」

高橋　純

アントナン・アルトーのフランス語版全集は1956年から刊行が開始されたが，その企画は彼の死（1948年3月4日）に少し先立って計画が進められていた。そして，出版社主のガストン・ガリマールと契約を交わす以前にアルトーは，自分の全集の総序と言うべきPréambule（序言）をしたためており，これが死後刊行された第一巻の巻頭を飾っている[1]。アイルランド旅行に続く十年に及ぶ精神病院生活という運命に見舞われて公的世界から隔離されていた彼にとって，全集の企画は，回顧的に過去の作品を総覧的に再刊することよりも，最近の著述を世に問うことにこそ意味があった。そこで彼は，全集の各巻に，それぞれに収めた過去のテクストに併せて，必要に応じて新たに彼が書いたものを挿入する旨の提案を出していた。結果的には，第一巻が死後八年にして出版された事情からして，この提案はその第一巻にしか実現を見なかった。ただし，そのようにして追補されたのは前述の「序言」だけではなかった。（この一文は，アルトー自身の予想をも超えて今日も未完結の全集全体への序文と見做すこともできようし，あるいは，第一巻所収の『ジャック・リヴィエールとの往復書簡』への言及も多いことから，当該巻向けの前書きと捉えることも可能だろう。）この「序言」と，それに続く最初期のテクスト群とのあいだには，やはりこの全集企画に併せて書かれた二つの「上奏文」が収められている。一つは「ローマ教皇への上奏文」（1946年10月

1）Antonin Artaud, *Œuvres complètes*, t.I, 1970, éd. Gallimard, pp.9-15.　なお，引用の訳については邦訳のあるものは参照させて頂いたが，筆者の解釈に従った部分も少なくない。〔『アントナン・アルトー全集1』現代思潮社，『神の裁きと訣別するため』宇野邦一訳，ペヨトル工房〕

1日の日付）であり，もう一つは「ダライ＝ラマへの上奏文」（本文には日付はないが，1946年12月2日に郵送されたもの）である[2]。

この全集第一巻にはアルトーがシュールレアリスム運動に没頭した時期のテクストもまとめられており，その中に上記のものと同じタイトルの二つの「上奏文」が収められている（いずれも『シュールレアリスム革命』第3号，1925年に掲載されたものである[3]）。こちらの「上奏文」は雑誌掲載時には署名がなかったが，種々の証言からアルトー自身の執筆が確証されている[4]。このことは，後年彼が自分の全集のために同題の「上奏文」を書き直していることからも確かと思われる。そして，彼が残した二対の「上奏文」を付き合わせて見ると，その異同の中に彼の意図のなにがしかが窺われると推測してもおかしくはない。彼は，1946年12月2日郵送の「ダライ＝ラマへの上奏文」に添えた手紙にこう述べている，「教皇への手紙の後に入れるつもりのダライ＝ラマへの上奏文を同封しました。これで私の全集第一巻はぐるりと巡って収支がつくはずです，根本的に[5]。」

「ローマ教皇への上奏文」の書きだしはこうである（1946年のもの）。

1° Je renie le baptême.

2° Je chie sur le nom chrétien.

2）実は1956年刊の第一巻には，1946年に書かれた二つの「上奏文」は掲載されておらず，1970年の増補改訂版で初めて「序言」の後に挿入されたのだった。これには，当初，それらの内容が冒瀆的であるとして出版元の自主規制で収録されなかったが，アルトーのテクストがその後あらたに発見され，また，アルトー評価の高まりとともに，大幅に改訂を加えた増補版が出された際に，これらの二文も加えられたという経緯がある。従って，1970年版の方がアルトーの意図に忠実であることは疑いない。例えば，*Magazine littéraire*, №287, 1991, pp.80-81.《L'Affaire Artaud》参照。

3）《Adresse au Pape》，《Adresse au Dalaï-Lama》，OC I, pp.383-339, 340-341.

4）*ibid*. p.439, 440. (notes de l'éditrice)

5）*ibid*. p.440.

3° Je me branle sur la croix de dieu (mais la branlette, Pie XII, n'a jamais été dans mes habitudes, elle n'y entrera jamais. Peut-être devez-vous commencer à me comprendre).
4° C'est moi (et non Jésus-Christ) qui a été crucifié au Golgotha, et je l'ai été pour m'être élvé contre dieu et son christ, parce que je suis un homme et que dieu et son christ ne sont que des idées qui portent d'ailleurs la sale marque de la main d'homme ; et ces idées pour moi n'ont jamais existé[6].

同じく「ダライ＝ラマへの上奏文」の書きだし。

Voilà combien d'époques ou périodes thibétains d'années, que vous tenez mon corps,
mon corps à moi, Antonin Artaud,
prisonnier de vos bibliothèques en bois de guitounes creuses, parmi les interminables bandes de peaux, les innumérables rouleaux catalogués de toutes les astuces de l'être, contre moi qui n'en suis pas un, mais un corps soumis à sa loi propre, celle de ma libre volonté.
……
j'ai à vous dire que vous, lamas, des Indes, de la Chine, de la Mongolie, et du Tthibet,
êtes tous des saligauds,
yogi en plus
et gourus foutus.

6)《Adresse au Pape》, *ibid*. p.17.

Vous n'avez pas de glotte en bouche, mais rien qu'un cu (sic) dans le cerveau[7].

いずれもがスカトロジックなあるいは猥雑な言辞の頻出する激烈な非難に終始する攻撃の文である。一言で言えば，これは，肉体蔑視の干からびた精神的権威主義に染まった宗教（的イデオロギー）に向けた告発なのだが，呪詛にも近い乱暴な言辞を除いてこのように内容を抽象化すると，その宗教批判はことさら新奇なものではないと言えよう。独特なのは，錯乱や幻覚に突き動かされているかのような異様な切迫感が漲っている点である。なぜアルトーはこのような文体で批判をあげつらわねばならないのかと問うと，そこには否応もなく彼の特殊個人的経験や病歴がかかわってきて，彼の思想を客観的に抽出する努力を阻もうとするかのようなのだ。事実，たとえば「教皇への上奏文」の冒頭 Je renie le baptême「私は洗礼を否認する」は，反キリスト教的信念の表明でありつつも，同時に，この一文の執筆に先立つ彼の病的体験の余波を感じざるをえない。いくつかの施設を移された後アヴェイロン県はロデーズの精神病院に到着した（1943年2月11日）アルトーは宗教的錯乱の直中にあったが，彼の信念は毎週のようにくるくると変わった。「私は自分がイエス・キリストに改宗したなどと馬鹿なことを言ってしまった。だがキリストこそは私が常にもっとも嫌悪してきたものなのです。またこの回心こそは，恐るべき呪縛が私に私自身の本性を忘れさせた結果にほかならない……」（アンリ・パリゾ宛書簡[8]）。そしてこの信念の「変更」は再々繰り返されたのだった。

あるいは，dieu et son christ ne sont que des idées「神とそのキリストと

7）《Adresse au Dalaï-Lama》, *ibid*. p.21.

8）《Lettre à Henri Parisot, le 7 sept. 1945》, OC IX, p.63. この時期にアルトーが置かれていた状況と，そこでの振る舞いについては，J.-L. Brau, *Antonin Artaud*, La Table ronde, 1971〔『アントナン・アルトー』安堂信也訳，白水社〕に詳しい。

は観念にすぎない」という言明に一つの思想を読み取ることは不可能ではないとしても，C'est moi (et non Jésus-Christ) qui a été crucifié au Golgotha「ゴルゴタで磔刑にされたのはイエス＝キリストではなくこの私だったのだ」にいたると，これは観念の表明に違いないとはしても，シュレーバー並みの精神分裂症的妄想に染まっているとするほうが真相に近いようだ。これをしも思想的表現とするならば，まずわれわれ自身の「思想」という観念そのものの変更が必要となるだろう。

すでに指摘したように，これら二つの「上奏文」は，二十余年前の同題のテクストの修正を念頭に書かれたと見做しうる。その先行の「上奏文」を見てみよう。まず「ローマ教皇への上奏文」(1925 年) の一節。

> Le Confessionnal, ce n'est pas toi, ô Pape, c'est nous, mais, comprends-nous et que la catholicité nous comprenne.
>
> Au nom de la Patrie, au nom de la Famille, tu pousses à la vente des âmes, à la libre trituration des corps.
>
> ……
>
> Nous ne sommes pas au monde. O Pape confiné dans le monde, ni la terre, ni Dieu ne parlent par toi.
>
> Le monde, c'est l'abîme de l'âme, Pape déjeté, Pape extérieur à l'âme, laisse-nous nager dans nos corps, laisse nos âmes dans nos âmes, nous n'avons pas besoin de ton couteau de clarté[9].

これもまた一種の攻撃文書ではあるが，制度宗教としてのキリスト教的イデオロギーの拒否の姿勢は明白に表しながらも，本源的な精神性への憧憬も窺える。そしてそれは，身体性を排除しない精神性，いわば肉体の生と融合

9）《Adresse au Pape》, OC I, p.338.

した存在の充溢として期待されている。

〔キリスト教〕社会は，身体性と精神性の融和に対立する阻害物と見做される。引用の後半にこうある：「われわれは現世の俗界にいやしない。その俗界に閉じ込められた教皇よ，大地も神もあんたの口を通じて語ることなどありはしない。俗界こそは魂にとっての深淵だ。老い耄れの教皇よ，魂の部外者の教皇よ，われわれに自分の肉体のなかを自由に泳がせよ，われわれの魂を自分の魂の中に安らわせよ，われわれはあんたの光明の刃などは欲しくもない。」ここには，精神性の象徴として「神 Dieu」という言葉も見られる。そしてこの精神性の実現の拠り所をして，この時期のアルトーの期待は非キリスト教的宗教に向けられていた。同じ時期，同じ雑誌に掲載された「ダライ＝ラマへの上奏文」はこう書きだされる。

> Nous sommes tes très fidèles serviteurs, ô Grand Lama, donne-nous, adresse-nous tes lumières, dans un langage que nos esprits contaminés d'Européens puissent comprendre, et au besoin, change-nous notre Esprit, fais-nous un esprit tout tourné vers ces cimes parfaites où l'Esprit de l'Homme ne souffre plus[10].

「われらはあなたの忠実なる僕です，偉大なるラマよ」で始まる一文は，先の「教皇への上奏文」と対照的なのは歴然としている。ただし，ここでのチベット密教への傾斜は知的好奇心と感情的な憧憬に支配されており，またキリスト教文化への反撥に動機づけられたものだろう。この引用の先には，「ラマよ，われわれに物質的空中浮揚の術を教えよ，いかにしてもはや大地の支えなしにいられるのかを教えよ[11]」とあるように，これは魂の自由への憧れの叙情的表明である。

---

10)《Adresse au Dalaï-Lama》, *ibid*. p.340.
11) *ibid*.

Car, tu sais bien à quelle libération transparente des âmes, à quelle liberté de l'Esprit dans l'Esprit, ô Pape acceptable, ô Pape en l'Esprit véritable, nous faisons allusion[12].

「なぜなら，あなたはよく御存じだからだ，魂のどれほどの透明な自由を，『精神』の中の『精神』のどれほどの自由をわれわれが言わんとしているかが，おお，われらが正当なる教皇よ，真の『精神』の教皇よ。」つまり，ここでの「ダライ＝ラマ」はありうべき「教皇」なのであり，ありうべき精神性（つまり身体性を排除しない全一的な生）の象徴である。

1925年の二つの「上奏文」からは，当時のシュールレアリストの誰もが呼号していた反西欧文化への傾斜と，上位の現実の存在への信仰表明に近い期待が唱われていることがわかる(事実これらは，シュールレアリスト・グループの一員としてのアルトーが無署名で掲載したものだ)。対するに，1946年の二つの「上奏文」は，すでに見たように激烈な告発と非難に貫かれている。この相違にこそ，アルトーが全集所収テクストの年代順を敢えて無視しても後者の二つの「上奏文」を書こうとした意図があるのではないだろうか。

1946年の「ダライ＝ラマへの上奏文」の一節に次ぎのようにある。

Vous n'êtes que des sales Européens après tous car le véritable Orient fut nordique,
du pôle infernal sud
qui vous a toujours foutu la frousse aux coudes en attendant de vous aigrir le cu (sic)[13].

「御身ら〔ラマたち〕はつまるところ汚らわしいヨーロッパ人にすぎぬ，け

12) *ibid*.
13)《Adresse au Dalaï-Lama》, *ibid*. p.23.

だし，真の東洋は北欧のものだった，地獄もかくやの南極に属するものだった。……」ここにアルトーの認識の変化が一つ指摘できよう。かつては彼において賞揚すべきイメージとしてあったチベット密教に象徴される東洋の精神世界は，晩年にはキリスト教的西欧文化とひとしなみに否認されるのだ。

100 guerres ont passé depuis 100000 ans en Europe ; et qui s'en est aperçu à Lhassa.
Lequel de vos moines y a perdu une jubilation sexuelle, ou un repas[14].

「過去十万年来，ヨーロッパでは百の戦争が過ぎ去った。そのことにヨーロッパはラサで気付いたのだ。御身らの僧侶たちの，いったい誰が，そこで，性的快楽を失ったろう，一回の食事すら失っていないのだ。」ここでは，アルトーの文化・歴史の認識の妥当性やそれぞれの宗教への理解の深浅を検討するのが目的ではない。そもそも彼は実証的検討を試みているわけでもなく，理論的批判を展開しているわけでもない。そうである以上，彼の言辞の背後に文化的・哲学的教養を深読みすることも，あるいはその言辞を病理的症状(幻想，脅迫観念)に還元することも等しく恣意的で危険と言えるからである。ここで重要と思われるのは，時代を隔てた二つのテクストの間の差異であり，そこに垣間みられるアルトーの基本姿勢の変化である。この基本姿勢とは，彼の表現行為（それが文学的なものであれ，理論的なものであれ，さらには幻覚的なものであれ）の主体のありようを規定するものと考えられる。

ここで，主体とは存在するものではなく，生成するものであるという構造

14) *ibid.* p.24.

論的常識を確認しておく。通常は単一存在と考えられている個人は，いかなる形であれあらかじめそれ自身で主体であるような存在ではない。近代の知識において主体＝客体（対象）という対の関係が大前提とされるとしても，主体および客体となるべきものがあらかじめ存在して，しかる後にそれらの間に関係が結ばれるのではない。事態はその逆であり，人間についていえば，誰しも最初から孤立した個人として自分を見出す者はなく，必ず他の存在者との歴史的，社会的，経済的等々の関係性の中で，自己を個人として考え，律することを学ぶのだ。諸個人の間にアプリオリに存在する主体＝客体関係はあるはずはなく，あるのは，二項の間の置換可能な間主観関係である。従って，個人であるとは，人を個人として認知する関係性に身を置くことであり，主体であるとは，この関係性を自己自身との間に作動させることと言える。つまり，主体とは，この関係性に同一化したかぎりにおいて認識される一つの生成状態として捉えられるべきものなのだ。そしてこの生成状態を維持し，強化しようとする関係性の組織が制度と呼ばれる。さらに，この関係性が人の自己の自己自身との関係に全面的に内面化されれば，人の意識（主観）は自らの裡に全世界を独占する（可能性を持つ）ことになり，その世界の主体は無論意識（主観性＝主体性）を持った自己同一的存在者である。ただし，その自己同一性は存在の根拠にあらかじめ具備されたものではなく，あくまでも生成されたものである。つまりこの同一性は変容も消滅もしうるものであり，もしもこの同一性（内在化された世界との合意）が人間性の証として強要されるなら，必ずやそこには，主体を特定の関係性，特定の世界に従属させる力（権力）が稼働しているはずなのだ。そのような権力は，人間に対して，その権力が認める生とは異なる別の（外部の）生の可能性を禁じてしまう。

アルトーがまさに身を以てこうした認識を持っていたことを推測させる一例として，彼の心身に係わる疾患とその治療経験を挙げることができる。彼が，五才の時に罹った脳骨髄膜炎の後遺症の頭痛や発作（身体的な圧迫感，圧縮感）の対症療法に麻薬剤を服用していたことや，精神病院に監禁されていた当時，電撃療法を再々強いられていたことは周知の事実である。それら

の効果がどれほどのものであったかよりも，その事実が彼の主体（意識）に対して持った意味を考えてみる必要がある。医療関係もまた，個人を社会の中で一個の主体として構成し，維持させる技術である。患者は治療を施される「対象」である以前に，患者である（と自らを認める）ことによってこの医療関係を実現するれっきとした「主体」なのだ（患者 sujet は主体 sujet にほかならない)。アルトーは，一人の病者であることによって，主体とは生成するもの（従って解体しうるもの）であり，また主体の自己同一性とは，その生成を促す関係性の維持によって（あるいはその維持を保証する権力関係によって）可能となることを知悉していたのだ。

Je sais assez qu'il existe des troubles graves de la personnalité, et qui peuvent même aller pour la conscience jusqu'à la perte de son individualité : la conscience demeure intacte mais ne se reconnaît plus comme s'appartenant (et ne se reconnaît plus à aucun degré)[15].

「私は人格の深刻な諸障害が存在することは充分承知している。それらはついには意識までをも冒し，その個性を失わせることさえある。というより，意識は依然として無疵ではあっても，もはや自主性をもっていると自覚できなくなるのだ。……」アルトーは，精神の病とは，主体の自己統制力の障害であることを承知している。ただしその際，人格が深刻に冒され，もはや個性が失われてしまうまでになれば，そこには主体の苦悩 angoisse が生じる余地もない。主体がそもそも存在していないのだから。いわばそこには人間の苦しみはないのだ。

Il y a des troubles moins graves, ou pour mieux dire moins

15)《Lettre à Monsieur le Législateur de la Loi sur les Stupéfiants》, *ibid*. p.81.

essentiels, mais beaucoup plus douleureux et plus importants pour la personne, et en quelque sorte plus *ruineux* pour la vitalité, c'est quand la conscience s'approprie, connaît vraiment comme lui appartenant toute une série de phénomènes de la dislocation et dissolution de ses forces au milieu desquels sa matérialité se détruit[16].

「深刻さという点ではこれより軽い，というか，より本質的ならざる障害がある。ただしそれらは，人間にとっては，はるかに苦痛にみち，重大で，生命力にとってはどうやら一層破滅的な障害である。それは，意識がその諸力の一連の解体，崩壊現象に対して，それがすべておのれに固有なものであることを自認し，承認してしまうときだ。その一連の解体，崩壊現象の真っ直中で，意識の具体性は崩れさるのである。」人格の完全な喪失ではない故に深刻さという点では軽いはずのこちらの障害が，人間にとってはるかに苦痛なのは，主体が主体たりうる条件であるはずの自己管轄権を奪われてゆく過程にあることを，当の主体が認識している（主体には自己喪失という自己意識のみがある）からである。そして，それが生命力にとって一層破滅的なのは，動物的生命の即自的（即時的）自己充足性が失われている（身体的生命感情の喪失，意識と身体の疎隔）故に，狂気とさえ呼ぶに値しない生命感情の消滅（「意識の具体性は崩れさる」）に行き着くだろうからである。アルトーにしてみれば，この生命感情を抜きにして正気や狂気を云々することは欺瞞的なのだ。

Lucidité ou non-lucidité, il y a une lucidité que nulle maladie ne m'enlèvera jamais, c'est celle qui me dicte le sentiment de ma vie physique. Et si j'ai perdu ma lucidité, la médecine n'a qu'une chose à

16) *ibid.*

faire, c'est de me donner les substances qui me permettent de recouvrer l'usage de cette lucidité[17].

「正気だとか狂気だとかいうが，いかなる病気によっても決して奪われない正気というものがあるのだ。すなわち，私の肉体的生命感情を私に伝えてくれるものがそれだ。……」主体の解体を身を以て経験しつつあるアルトーにとって，先験的に存在する主体，そこに同一化することによって諸個人に社会的共通性を帯びさせる規範としての主体性といったものはひとつの虚構の強制でしかない。それは，直接的な生命感情に課される文化的・社会的な枠にすぎない。彼はその生命感情を失っている故にこそ，それが一つの作られた装置でしかないことを知っている。この装置は，この装置（関係性を生み出す装置）によって構成される主体が，自らを自然的存在と思い込み，従って自分を構成する当の装置もまた先験的な自然的存在であると思い込ませるべく，法律で偽装した権力を行使する。「正気」（肉体的生命感情）の回復手段として麻薬剤を服用した経験のあるアルトーは，この点を見抜いていた。

La loi sur les stupéfiants met entre les mains de l'inspecteur-usurpateur de la santé publique le droit de disposer de la douleur des hommes ; c'est une prétention singulière de la médecine moderne que de vouloir dicter ses devoirs à la conscience de chacun. Tous les bêlements de la charte officielle sont sans pouvoir d'action contre ce fait de conscience : à savoir, que, plus encore que de la mort, je suis le maître de ma douleur. Tout homme est juge, et juge exclusif, de la quantité de douleur physique, ou encore de vacuité mentale qu'il peut honnêtement supporter[18].

---

17) *ibid*. pp.81-82.
18) *ibid*. p.81.

「麻薬剤に関する法律は，公衆の健康の検閲官兼簒奪者の手に，人間の苦悩を左右する権利を委ねてしまうものだ。人それぞれの良心の上に，自らの義務なるものを押しつけようとするのは，現代医学の奇妙な自惚れである……」麻薬剤は人の健康と正気を損なう，故に法律はこれを規制する。ならば，法律が定める健康と正気の規範があるのかといえば，直接的にはそうではない。法律に抵触しないように医療関係が構成され，その関係に諸個人が自らを対象化してゆくところに，おのずと法律を遵守しつつその医療関係を実現する主体（患者）が形成されてゆくのだ。アルトーはそのような主体を拒否する。彼が被った電撃療法についても事情は同じである。これは法的権力の代行として，身体に直接加えられた暴力に他ならないのだから。逸脱（狂気）に対する規範（正気）の側からの制裁であり，順致の技術といえる。アルトーは，そのような主体形成（拘束）の関係性の技術（詐術）を断じて認めない。「すべての人間は，誠心誠意自分がどれだけの肉体的苦痛に耐え，どれだけの精神的空虚に耐えられるかを判定する裁判官であり，それも唯一の裁判官なのだ。」

このように、十全に自分自身に対する唯一の裁判官である人間というのが，アルトーの求める主体であるはずなのだが，これは，純粋状態であらかじめ存在する個人ではありえない。(Il y a des imbéciles qui se croient des êtres, êtres par innéité[19].「われこそは存在する人間だ，先天的に存在する人間だと信じている馬鹿者どもがいる。」）それは，あらゆる関係性への主体化（従属）の拒否を通じて自己を探り，その関係性の外で自己を実現しようと図る，反＝主体である。これは，いかなる関係性（意味性）をも呼び込む以前の地点にしかありえない故に，ゼロ記号として概念化できそうではあるが，実定的に指示しうる固定した単一存在ではない。この反＝主体は，与えられた関係に主体化してゆく（自らを対象化させる）技術を行使しない（拒否する）

19)《Préambule》, *ibid*. p.11.

故に，半面盲目ではあるが，思考することをやめない。そしてその思考は，生そのものに主体化しようと願うのだ。

……je n'appelle pas *avoir de la pensée*, moi, voir juste et je dirai même *penser* juste, avoir de la pensée, pour moi, c'est *maintenir* sa pensée, être en état de se la manifester à soi-même et qu'elle puisse répondre à toutes les circonstances du sentiment et de la vie. Mais principalement *se répondre à soi*[20].

「私は，思想を持つということで，正しく見るとか，さらには正しく考えるということを意味しているわけではない。私にとって思想を持つとは，自分の思考を維持しつづけること，自分自身にそれを明示しうる状態にあること，そして思考が感情と生のあらゆる状況に呼応しうるものであることを意味する。とりわけ重要なのは，自分自身に対応しうるということである。」このような思考する主体（反＝主体）は，そもそも主体とは関係性の中で自らを主体として実現することによって構成されるものであるかぎり，現実の中に場を持ちえない。とはいえ，それは存在するはずである。なぜなら，存在への意欲としてのその反＝主体がなければ，いかなる関係性を前提しても，その関係性を現実化する主体が生成する契機もありえないからである。

Il est si dur de ne plus exister, de ne plus être dans quelque chose. La vraie douleur est de sentir en soi déplacer sa pensée. Mais la pensée comme un point n'est certainement pas une souffrance.

J'en suis au point où je ne touche plus à la vie, mais avec en moi tous les appétits et la titullation insistante de l'être. Je n'ai plus qu'une

20)《Lettre à Monsieur le Législateur……》, *ibid*. p.81.

occupation, me refaire[21].

「もはや存在しない，もはやなにかの中にいないとは，実に辛い。真の苦痛とは，自分の中で思考が位置を変えてゆくと感じることだ。だが，一つの点のような思考は，確かに苦しみではない。／今や私の到り着いた地点では，私はもはや生に触れていない，だが，裡には，存在への嗜欲，存在の執拗にくすぐる快感を抱いたまま。もはや私の仕事はただ一つ，私自身を作り直すことだ。」これが，アルトーの生涯の企てとなる。ただし，このアルトーの「私」とは，作品を生み出す主体でもなければ（Là où d'autres proposent des œuvres je ne prétends pas autre chose que de montrer mon esprit[22].「他の連中が作品を差し出すところに，私は自分の精神以外のなにものも示すつもりはない」），作品化された主体でもない（Ce que vous avez pris pour mes œuvres n'était que les déchets de moi-même, ces raclures de l'âme que l'homme normal n'accueille pas[23].「君らが私の作品とみたものは，実は私自身の裁ち屑，通常の人間には受け入れられぬ魂の削り屑でしかなかった」）。では，この「私」とは何なのだろうか。

アルトーは，「私」と語る人間の起源に「主体」を見出さなかった。この主体が解体してゆく経験の過程で，なおも「私」と語る身体に行きついた。しかしこの身体もまた起源ではありえない。身体を介して人間は歴史の中に投錨され，様々な関係性を実現する主体として形成されてゆくのであるから，この身体もまた，この関係性に従属する主体の下支えである。人間は，身体によって，それ以上分割不可能な個人として関係性の中に登録され，その身

21)《Le Pèse-Nerfs》, *ibid*. p.117.
22)《L'Ombilic des Limbes》, *ibid*. p.61.
23)《Le Pèse-Nerfs》, *ibid*. p.114.

体と意識の間に恒常的な関係を実現し維持することによって，自己同一性（人格）を獲得する。しかしアルトーは，個人的に，この自己同一性は関係性において生成し，そこへの順応によって維持されるものであることを知っていたし，身体もまた常にすでに文化的・社会的規範を刻印された，順化と適応の産物であることを見抜いていた。だからといって彼は，人間存在の根源の哲学的探究を目指したわけではなかった。ただひたすら，主体の解体の後にもなお「私」と語る（語りうる）生の力を，あらゆる順応主義と拘束から解き放ち，これに自由をもたらそうと願ったといえる。ただしこの自由は，もはや人間主義的な自由意志の行使といったものではなく，アルトーに倣えば，人間が本来的に受容すべき「残酷な」宇宙法則になぞらえられるものである。さらに彼は，これを観念的な希望や思弁として提示したのではなく，現実（の変革）の実践プログラムとして打ち出したのだった。そして彼はこの計画を，客観性をもった科学的イメージで描いてさえいた。しかもそれは，彼が実在のユートピアあるいは神話を求めてメキシコへ赴いた時期に重なっている。

> Avoir conscience de tout ce qui, matériellement, nous unit à la vie générale est une attitude scientifique que la science d'aujourd'hui ne peut nier puisque, par ses récentes découvertes en physique, elle réduit le monde à n'être qu'un énergie ; et par ses dernières découvertes psychologiques elle nous montre que l'homme n'est pas une entité immobilisée, mais que, par les régions souterraines de sa conscience, il participe aussi bien du futur que du passé[24].

「われわれが普遍的生に物質的に一体化していることを自覚するのはひとつの科学的な態度なのであり，現代科学もこれを否定するものではない。と

24)《Secrets éternels de la culture》, OC VIII, 1980, pp.227-228.

いうのも，物理学における最近の発見を踏まえる科学は，世界をエネルギーに還元してしまうものであるし，心理学の新発見によってわれわれは，人間は不動の実体などではなく，意識下の領域を通じて未来にも過去にも生きていることが証明されているのだからである。」ただしアルトーは，科学を後楯に証明や説得を試みているわけではない。これはあくまでも「物質的」に局限された世界のイメージでしかない。ただ，翻って人間の世界を見ると，こちらはいわば古典的科学観に根ざしたイデオロギーで膠着した世界でしかないことが瞭然となる。

Nous participons à toutes les formes possibles de la vie. Sur notre inconscient d'homme pèse un atavisme millénaire. Et il est absurde de limiter la vie. Un peu de ce que nous avons été et surtout de ce que *nous devons être* gît obstinément dans les pierres, les plantes, les animaux, les paysages et les bois[25].

「われわれは生命のあらゆる形態を分けもっている。われわれ人間の無意識には，幾千年に及ぶ先祖の特質が連綿と受け継がれているのだ。このような生に制限を加えることほど馬鹿げたことはない。われわれがかつてあったところのなにがしか，そして何よりわれわれがあるべきところのなにがしかが，石や，植物や，動物や，風景や木々の中に執拗に潜んでいる。」これは人間の，詩的イメージではなく，科学的イメージであり，あるいは，科学的イメージの詩的翻訳である。そして，このことは，なにも現代科学の新発見をまたずとも，アニミズム的世界観の中にも，自然との親和を歌う叙情詩にも登場する珍しくもないイメージであろう。それでは，アルトーがこのテーマをことさらにここで語ることにはどんな意味が考えられるのだろうか。科学と詩の

25) *ibid*. p.227.

出会いと融和ができたということだろうか。それならば，詩は科学よりも進んでいたことになるだろう。はたしてそうなのか。アルトーは，自分の企図の正しさを科学的に裏付けようとしているわけではない。ただ，現代科学が「物質」概念を更新したように，「人間」概念の更新可能性を訴えるのだ。二十世紀の科学が原子は物質の分割不可能な最小単位ではなく，物質とはエネルギーの可逆的一状態でしかないと言明しているにもかかわらず，人間については，個人 individu を社会の最小不分割単位とし，これに自己同一的主体の役を振り分けるのは，古典科学と同じ誤った仮説の強要ではないか。かといって彼は，一見科学の物質観や人間観を先取りしたようにみえる詩や宗教に救いを見出しているわけでもない。この点を納得するためには，科学と詩を彼がどう捉えていたかを知っておく必要がある。

> ……selon le *Tao te King* de Lao Tseu, au centre de tout, du *tout* universel, est le vide. Cela veut dire qu'il y a un vide que la science ne comblera jamais ; cependant la poésie, si on la conçoit comme un moyen utile et rationnel de divination, peut nous servir à établir les fondements qui nous permettent d'avancer[26].

「老子の『道徳経』にいわく，すべての中心，宇宙的全体の中心には空がある。すなわち，そこには，知〔科学〕では決して満たされない空虚〔大虚〕が存在するのだ。しかしながら詩は，この詩を適切かつ合理的な予言手段と見るならば，われわれの前進を可能にするはずの基礎の確立に寄与しうるのである。」科学は「対象」がなければ成立しない。対象たりえないもの〔大虚〕に対しては無力であり，行動力を持ちえない。その先へ進むのが詩であり，予言〔アルトーは『易経』を念頭に置いている〕とされる。つまり詩は「行

26) *ibid*. p.226.

動者的 acteur」なものとされる。ところでアルトーは既成の「詩」なるものを容赦なく糾弾してもいる。

> Le poète qui écrit s'adresse au Verbe et le Verbe a ses lois. Il est dans l'inconscient du poète de croire automatiquement à ces lois. Il se croit libre et il ne l'est pas[27].

「ものを書く詩人は『御言葉』に訴えるが，その『御言葉』には法則がある。無意識裡に詩人はこの法則を自動的に信じてしまう。彼は自分こそは自由であると思っているが，そんなことはありはしないのだ。」この「御言葉」とは，本来的に人間が発した言葉ではなく，人間が発する言葉が何を代行＝表現すべきかをあらかじめ決定している言説の体制に他ならない。その法則とは，言葉を発する人間の無意識に外側から課されたイデオロギーである。そうであれば，詩は，創造とは程遠く，この言説の体制をなぞる順応主義的な模倣にすぎない。そのとき詩人は，詩の主人〔主体〕ではなく，「御言葉」に従属した下僕にすぎない。そんな詩人が自分を詩人という創造的主体と思い込むと，一つの環が閉じる。つまり，言説の体制に主体化を果たした詩人が，今度はこの言説の体制，つまり表象の世界をひたすら再生産し，この体制を強化することになるのだ。詩人は，自分を自分自身の主人と思い込みながら，実は自分を生み出したものを戯画的に再現しているにすぎない。

> Je ne veux pas être le poète de mon poète, de ce moi qui a voulu me choisir poète, mais le poète créateur, en rébellion contre le moi et le soi. Et je me souviens de la rébellion antique contre les formes qui venaient sur moi[28].

---

27) 《Révolte contre la poésie》, OC IX, p.143.
28) *ibid*. p.144.

「私は自分の詩人の詩人などになりたくはない。つまり，私を詩人に選ぼうとした例の自我の詩人など御免こうむる。私は，自我と自己への反逆を貫く創造的詩人でありたい。私が押し着せられた諸形式に対して起こした古き反逆の姿を私は忘れない。」アルトーが詩に反逆するのは，詩が，人間を主体へ監禁する一形式と化すかぎりである。このとき彼は，この形式に抗う「行動」の中に真の詩を見ている。この行動は無論表象の再現の運動ではなく，この表象の世界に身を委ねてしまうことの拒否の運動である。表象の世界とは，ある言葉があるものを意味する（表象する）ように規定された言説の体制である。これは言語（言説体制の構成要素の総体）ではなく，言葉を特定の象徴秩序に方向づけ，集約〔収奪〕する機能をはたす装置なのだ。この装置に自己を対象化する意識は，生の身体性を喪失して，表象の再生産に携わることにのみ自己維持の可能性を求めざるをえなくなる。アルトーはこれを生の破局状態と見るのである。

Le moi et le soi sont ces états catastrophiques de l'être où le Vivant se laisse emprisonner par les formes qu'il perçoit de lui. Aimer son moi, c'est aimer un mort[29)]……

「自我も自己も存在の破局状態にすぎず，その状態の中に『生者』は，存在について自分が知覚した形態によって捕縛されてしまっている。己が自我を愛でることは死者を愛でるに等しい。……」主体の形成は言説の体制の実現と相俟っている。この体制を「御言葉」として，これに身を擦り寄せる詩人は，その実倒錯者に等しい詩の殺害者だとアルトーは告発する。

L'inverti est celui qui mange son soi et veut que son soi le

29) *ibid*. p.145.

nourrisse, cherche dans son soi sa mère et veut la posséder pour lui. Le crime primitif de l'inceste est l'ennemi de la poésie et le tueur de son immaculée poésie[30].

「倒錯者とは，己れの自己を食らいながら，その自己が己れの滋養となると思い込み，自己の中に己れの母親を探しまわり，その母親を一人占めしたがる奴だ。近親相姦の原罪は詩の敵対者であり，その無垢の詩の殺害者なのだ。」アルトーは，非肉体化された主体が再生産する表象を，詩を抹殺するものとして斥ける。それは，「御言葉」を通して生まれた主体（とその主体を支える体制）を再現するだけのものだからだ。そして，その再現の過程で，永遠の真理である「御言葉」に保証された主体の自己同一性が顕揚される裏では，生の持つあらゆる形態の可能性が抹殺されてゆく。その可能性の中にこそ，アルトーの求める詩が生きうる道があるというのに。ならばアルトーがこの道を辿ることはどのようにして可能なのか。すなわち，表象の体制の外部に出ることはいかにして可能なのか。

……Je ne veux pas me reproduire dans les choses, mais je veux que les choses se produisent par moi. Je ne veux pas d'une idée du moi dans mon poème…… Je ne veux être que ce poète à jamais qui s'est sacrifié dans la Kabbale du soi à la conception immaculée des choses[31].

「私は事物の中に自分を再現したくなどない。私は，事物が私によって生まれ出ることを欲している。私は，自分の詩の中に自我の観念など持ち込みたくもない……私がひたすら望むのは，自我の降神術的策謀の直中に捕らえられながらも，事物の処女懐胎のために身を捧げた詩人になりきることなの

30) *ibid*.
31) *ibid*. p.146.

だ。」あらゆる形態の可能性を秘めた生を現実化すること，つまり，表象の再現ではなく，生の力を事物の出現（出来事）として実現することにアルトーは詩の存在を認めている。この詩はなにものも「表現」しないだろう，少なくとも，表現が，言説体制に組み込まれた表象の代行＝表現を意味するものであるかぎりは。では，この詩は何なのか，あるいは可能なのか。

「御言葉」あるいは表象の世界は原理的に無時間の世界である。そこでは，不易の真理（原則的に永遠のものでなければならない）を担う自己同一的主体（これも原則的に永遠のものでなければならない）のみが所属できる。変化するもの，自己差異的なものはそこでは市民権を持たない。だだしそれは，空間的・物理的に外部に放逐されることを意味しない。変化するものは，無時間の精神世界の存続にとって否定的なものである故に，これを馴致して，精神世界の維持に奉仕させることが必要となるのだ。そして，人間にとって最も身近にあり，しかも絶え間なく変化する故に精神にとって邪魔な存在が身体であり，さらにはその身体が現実化する生そのものである。そこで，生そのものを馴致する二つの方策が編み出される。一つは，身体存在に「内面」という不変性を押しつけて，これを個体が共有すべき人間性（主体性）として価値化し，もう一つは，不可避的に変化する身体的存在を，経験の普遍的形式としての時間（歴史）に従属させることである。

人間存在は世界の中にあることとして規定される。そして様々な関係性の主体と化す人間は，その関係を通じて世界を制圧する。制圧された世界は，主体の自己自身に対する関係の裡に内面化され，今度は人間存在の根拠がその内在性に求められることになる。一方時間は，主体の経験の先験的な形式として与えられるから，その外部はありえないことになる。この時間は変化の同意語ではない。反対に，それは恒常性の形式であり，主体の同一性の維持装置である（主体は経験〔時間〕のなかでこそ自己に同一であることを知るはずなのだから）。こうして，世界内存在としての主体的人間には世界の外部がないことになる。では，この世界から逸脱する者はどうなるのかといえば，人間的自然の自然，盲目の自然たる身体の自然の中に迷い込む（とされ

る）のだ。これが，精神が肉体に対する統括力を失ったとされる狂気の基本構造であり，精神の疎外としての狂気である。

身体が，盲目な自然として抑圧されてあるかぎりでは，主体的人間の世界に外部は現れようもないのだが，この身体こそは（抑圧された）外部なのだ。そして，時間が主体維持の恒常性の形式であるかぎり，不断に風化する量塊としての身体はまた時間の外部でもある。アルトーによれば，キリスト教の歴史とはこの身体の制圧の歴史にほかならない。イエス＝キリストがその肉体の死をもって全世界の罪を贖った時から，すべての肉体は抑圧すべき不浄の対象性を刻印され，他方，この不浄の身体性を克服して人間たらんとする者は，永遠の霊を分有する精神として生きることを至上命令として課されたのだ。つまり，キリストの磔刑は，キリスト教精神の誕生を画すると同時に，その精神の外部〔肉体〕の排除を宣言するものだった。以後の西欧の歴史が，この精神を恒常的に維持してきたかぎりにおいて，二千年の過去はアルトーの現在の肉体に現存して抑圧の権能を揮っている。だからこそ，彼の認識においては，「ゴルゴタで磔刑にされたのは，イエス＝キリストではなく，この私だった」のだ。

Or j'ai été arrêté, emprisonné, interné et impoisonné de septembre 1937 à mai 1946 exactement pour les raisons pour lesquelles j'ai été arrêté, flagellé, crucifié et jeté dans un tas de fumier à Jérusalem il y a un peu plus de deux mille ans./Il y a dirais-je d'ailleurs beaucoup plus de deux mille ans./Car ce chiffre de deux mille ans représente les 2000 ans de vie *historique* écoulés depuis la mort du crucifié du Golgotha jusqu'à aujourd'hui. Historique, c'est-à-dire officiellement recueillis, repérés et inventoriés. Car en fait le temps ce jour-là a fait faire aux choses un saut terrible[32)]……

32)《Adresse au Pape》, OC I, p.19.

「ところで，この私が1937年9月から1946年5月にかけて，逮捕され，投獄され，拘禁され，毒を盛られたその理由は，かつて二千年少し前，エルサレムで私が逮捕され，鞭打たれ，磔刑にされた……のと同じ理由なのだ。いやそれは二千年よりずっと前のことだ。というのも，この二千年という数はゴルゴタの磔刑者の死後今日までに流れた二千年の歴史的生活だからである。歴史的，つまり公的に集められ，印をつけて，年表に整理されたものだからだ。本当は，あの日，時間は事物に恐るべき跳躍をせしめたのだった。……」狂気のアルトーの身体は時間（歴史）の外に出る。あるいは歴史の外に出ることが狂気に至らしめるのだろうか。言いうることは，この外部が現れるとしたら，それは常に身体としてであるということだ。身体は，生成と風化の絶えざる変化の場であるが，それ自体は歴史を作りはしない。この身体に，自己自身との関係という内面性を埋め込むのが時間であり，身体の表面に様々な出来事を刻みつけ，これを特定のパースペクティヴに整序したものが歴史と呼ばれる。そして，内面性が価値の根拠をなし，歴史が表象の体制を作る。こうして出来上がった価値と表象の秩序が，真理と誤謬を等しく生み出す身体の言葉（これは言語活動であってもよいし，非言語的活動であってもよい[33]）を検閲し，排除＝選別し，また抑圧もする。アルトーはこの検閲の歴史の外を目指す。しかしそれはもはやノスタルジーとしての非キリスト

33) 言語（ラング）は特定の空間を占めるものではないが，一切の事物は言語（ラング）の中に表出されて一つの世界を開く可能性をもつ。一切の事物とは，異質なるものの混在であるが，意味作用と規則によってはたらく言語（ラング）を特定の関係〔世界〕の表現に限定使用するところに，体制としての表象の世界が成立し，そこへの帰属をはたさないものは排除と抑圧の対象となる。しかし，生が言葉〔あるいは言語活動（ランガージュ）〕として打ち出すものは，原初的な異質なるものの混在なのであるから，あらかじめ表象性を担っているのでもなく，言説の体制に帰属しているわけでもない。この体制から脱出を図る言葉もあるのだ。アルトーが，分節言語（を含んでもよいが）とは区別される，「あらゆる言語（ランガージュ），つまり，動作，音，言葉，火，叫びなどを使う」（OC IV, p.19）演劇の言語を要請したのは，この原初の異質性の混在を肯定し，一切の事物の生成を促す言葉，つまり生に触れうる言葉を求めたからこそである。異質性の接合素子をアルトーは言葉と呼ぶのだ。

教文化ではない。なぜなら，精神と観念が身体に優越し，身体の抑圧を通じて存在の不変の根拠に至れるとする信仰が幅をきかす世界は，それがどこにあろうと，アルトーが逃れようとする歴史と相同的だからである。

> Vous n'êtes que des sales Européens après tout…… C'est vous qui êtes cause du syllogisme, de la logique, de la mystique hystérique, de la dialectique,/et vous êtes cause en plus de ce pus d'êtres, décanté/de l'ontologie,/car vous êtes cause de l'anatomie de chancre stupide où pourrit l'homme d'aujourd'hui[34].

「結局のところ，御身ら〔ラマたち〕は汚らわしいヨーロッパ人にすぎぬ……御身らこそは，三段論法の原因，論理の，ヒステリックな神秘神学の，弁証法の原因，／またさらに，御身らは存在どもの膿の原因なのだ，／存在論から／傾瀉して分離されるあの膿の。……」存在論は，変化する生のさなかの人間に普遍（不変）の内在性をさずけると称して，生の現実を抽象化してしまい，観念の中に監禁された存在は腐敗を招き，膿を生じる。「けだし，御身らは，今日の人間が腐りゆく，愚劣な下痢の解剖学の原因であるからだ。」精神と肉体を分離し，その間にヒエラルキーや従属関係を指定する存在論という解剖学が，歴史の外に出ようとするアルトーの身体に電撃療法を加えてでも，彼を「正常な」精神の側に引き戻すことを正当化するのだ。ただし，ここに至って，この「正常」という語にもはや決定的な意味のないことは歴然としている。

アルトーは，身体にこそ真理が宿ると説いたわけではなかった。生は真理と等しく誤謬をも生み出す。それは常に身体を通してであって，その意味で身体は生のあらゆる形態の可能性に開かれている。この可能性を閉ざすもの

34)《Adresse au Dalaï-Lama》, *ibid*. pp.23-24.

が，件の解剖学が人間存在の上位器官と規定する精神への信仰，あるいは世界内存在の裡に自らを監禁してしまう主体への信仰と，身体の従属化のためにその信仰を後楯として行使される権力である。アルトーはこの権力を「神の裁き」と呼び，これと訣別しようとする。彼が記した二つの「上奏文」(1946年のもの）は，この「神」への絶縁状だったといえる。それはもはやキリスト教の神に限定されえない，普遍性を標榜する精神（という器官）すべてに向けられた訣別である故に，ローマ教皇のみならずダライ＝ラマに対しても突きつける必要があったのだ。では，この訣別の後に身体はどうなるのか。

> Il faut se décider à le [=homme] mettre à nu pour lui gratter cet animalcule qui le démange mortellement,//dieu,/et avec dieu/ses organes.//Car liez-moi si vous voulez,/mais il n'y a rien de plus inutile qu'un organe.//Lorsque vous lui aurez fait un corps sans organes, vous l'aurez délivré de tous ses automatismes et rendu à sa véritable liberté.//Alors vous lui réapprendrez à danser à l'envers/comme dans le délire des bals musette/et cet envers sera son véritable endroit[35].

「決然として彼〔人間〕を裸にし，彼を死ぬほどむずがらせるあの極微動物を掻きむしってやらねばならぬ，／／神，／そして神とともに／その器官ども。／／私を監禁したいならするがいい，／しかし器官ほど無用なものはないのだ。／／人間に器官なき身体を作ってやるなら，／人間をそのあらゆる自動性から開放してその真の自由にもどしてやることになるだろう。／／そのとき人間は再び裏返しになって踊ることを知るだろう。／まるで舞踏会の熱狂のようなもので／この裏とは人間の真の表となるだろう。」踊りとは，身体の表面で（そしてそこでのみ）演じられる，生に秘められたあらゆる形態

35)《Pour en finir avec le jugement de Dieu》, OC XIII, 1974, p.104.

の可能性の実現であり，その自由な組み合わせである。そしてその組み合わせにおいては，二千年の「公的」歴史を跳び超えた結合も一つの身体の現実として生起するのだ。ここには，表象の支配から自由な思考の試みがあり，その試みを通じてある独自の理性が構成されてゆく。アルトーに倣って言えば，精神の裏側にこそ身体の表面が広がっている。その表面に生起する出来事を打ち出す言語を，彼が表象の代行＝表現の外部に求めたのは理に叶っていた。そして，それ故に，その言語が狂気と見紛うばかりであるとしても致し方ない。ただしここでは，「狂気」という語も，言説の体制の境界を朧気に跡づけることしかできない。アルトーの言語の中で，われわれはかつて永遠不滅と思われていたものが，生成と解体の場に導き入れられる光景に立ち会っている。それは，真理や誤謬，理性や狂気の分離に先立つ出来事だと言わねばならない。